千刈狸の呟き

～ 人生の最期の迎え方 ～

仔　狸

Wikipediaで検索すると、終活（しゅうかつ）とは「人生の終わりのための活動」の略であり、人間が人生の最期を迎えるにあたって行うべきことを総括したことを意味する言葉とかいてあります。2009年ごろから少しずつ広まってきたようです。遺言書というのは昔からあったことでしょうが、自分の入る墓石を用意したり、生前葬を行ったりなどいろいろな終活の形があります。実際考えてみると、死がまだ遠い先にあると思われる人にとっては自分の納得のいく形での終活ができる余裕は精神的にも肉体的にもあるのでしょうが、本当に死が近づいた人にとってはとても大変なことだと思われます。生命保険でもリビングニーズというような余命半年と言われたら受けられるものなど、人が少しでも良い最期を迎えるためのサポートは終活という言葉が広まる前からありましたが、病気の告知の問題やいろいろあり、余命半年と宣言して申請したことはほとんどありませんでした。

病院という場で仕事をしていると、最期が近づいてきている人のどれだけが自分の旅立った後のことを考えているだろうか…と思わされることはたびたびあります。自分の病状についてすべてを知ったうえで入院している人でも、日々病院で生活するのが精一杯という場合がほとんどだと思われます。いざ家に帰っていろいろなことを段取りしたいといっても体が思うようにならない人もたくさんいます。ときには日々自分の仕事を精一杯やってきてちょっとくらい調子が悪い時も、少し休めば治るだろうと思って過ごし、稲刈りの時期が終わったから受診したというような場合もあります。そのまま検査をして、入院をして、初診の時点で病状はすでに進行していて終末期といわれるような場合もあります。このような場合は自分の置かれた状況を理解できず、もうすぐ自分は死んでしまうかも…などとは思えるはずもありません。時には、家族から本当のことは言わないでほしいといわれることもあります。職業柄人の最期の時期を知ってしまうことができる私達は、体の動くうちにいろいろな準備をする時間を作ってあげたいと思うのですがなかなか思うようにいきません。元気なうちに家で過ごしましょうとか、仕事の段取りを息子さんに教えてあげて…という言葉も空回りすることが多いのが現状かと思います。

狸の世界の話になりますが、まだ終活という言葉は世に広まっていなかった頃、叔母狸はこの世を去りました。かなり高齢でしたが、息子狸一家と同じ敷地内に自分のねぐらを構え、食事も自分で好きなものを用意し、風呂だけ母屋に入りに行くという生活をしていましたが、ある日なかなか母屋に来ないから息子狸が見に行くとそのまま眠るように旅立っていたとのことでした。突然の出来事でしたが弔いの準備を整え、私たち狸一家も葬儀に参列し、直会の席で叔母狸について語っていると、叔母狸は息子狸夫婦や孫狸にそれぞれ別々に、もしも自分に何かがあったらどう行動するのかをお願いしていたことを聞きました。息子狸たちも、いざ弔いの用意をするときになって初めて、それぞれが役割を言いつかっていたことを知ったそうです。一連の葬儀は誰一匹あわてることなく、滞りなく終了しました。お見事としか言いようのない最期だったと思います。

東日本大震災から４年が過ぎた今でもまだ日常に戻れない人たちがたくさんいます。４年前、まさかこの日に自分が亡くなるなどとは夢にも思わず亡くなっていった人たちのことを思うと心が痛みます。まだまだ将来を夢見る若い人も、そろそろ自分の最期を考えようと思っていた人も、…自分なりに終活をしていた人もすべてを津波が呑み込んでしまったかと思うと、本当に遣る瀬無い気持ちになります。そう思うからこそ、終活できるチャンスのある人にはできるだけ悔いの残らない最期を迎えるお手伝いができたら…と思います。稲作を行っている人にとっては少しずつ暖かくなってきて、自分の最期の計画よりも稲の苗の管理が心配になる時期だろうと思います。残念ながら、自分が作付した稲を収穫できない可能性もあります。自分が最期を迎えた後も悔いが残らないように、後継者に自分の口で段取りを伝えることも大切な終活だと話さなければならない今日この頃です。